

# マザーテレサの現代的意義 —「神の似姿（イマゴ・デイ）」の尊厳回復への招き—

小林 宏子

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、日本社会全体に自然エネルギーの巨大さとその前に置かれた人間の無力さを痛感させた。現代的科学技術の成果を過信し、地域伝承に含まれた経験知の警告を軽んじた社会制度の結果とはいえ、その被害の甚大さと悲惨さは人をして驚愕させずにはおかなかった。メディアを通してこの世の無常を目の当たりにした衝撃は直接の罹災を免れた人々にも従来の生き方の反省を迫り、生そのものの価値と日常の有難さに感謝する心や人との絆を尊ぶ精神を回復させた。震災後の日本社会全体の復興に合わせた価値観の見直しの時期に合わせ、本論は、宗教的視座の導入を提案する。ただし、それは、宗派を超えて広く人々に受容されているマザーテレサの視点に沿った生き方の選択においてである。

## 1. はじめに

今年、震災は今まで無宗教を標榜してきた多くの日本人の口に「神はいるのか、もしいるなら、神はなぜ悪を許されるのか」という神義論的問いを上らせた。そして、伝統的宗教を見直し、救いへの関心を高める人が増加し、大学生の間では宗教がサブカルチャーとなる風潮も見られたという<sup>1</sup>。しかし、その一方で、オウム真理教による地下鉄サリン事件実行犯の裁判報道を見るかぎり、日本社会には人間性に含まれる超越への憧れを、現実否定のカルト的破壊行為に転落させることなく実現させる方法が、広く共有されていないことが伺えた<sup>2</sup>。1995年の事件から16年以上が経過するが、依然として、宗教の正邪を見分ける識別基準は、社会常識としては明確化されていない。そのため、実際には、宗教全般を警戒する意識が消えないのであろう。

震災以前から日本社会には、新自由主義経済のグローバル化に伴う競争激化の結果として、勝ち組、負け組なる二極構造が顕在化していた。弱肉強食の原理は人々を不安のつぼに落とし入れ、個人主義的防衛に走る衝動を煽っていた。自殺者数は1998年以降3万人を超す

1. 2011年11月15日付け朝日新聞、伊佐恭子著「いま、宗教を知りたい」

2. 2011年11月18日に中川智正被告、11月21日に遠藤誠一被告の上告審判決が降り、各紙はオウム真理教裁判終結を報じる記事を掲載した。

状態が続き、うつ病発症者 100 万人以上、いじめの蔓延による不登校、ニート、引きこもり層の拡大と、生活困窮による育児放棄、幼児虐待件数の増加など、人々が心を病み、精神的救いを求めて喘いでいることは明らかであった。そこへ、3.11 が追い打ちをかけるように打撃を与えたため、将来を絶たれた人々の苦しみは極限に達している。他にも、本来であれば働き盛りであるはずの現役世代までも含む生活保護受給者が 205 万人を数えるという貧困層拡大や、派遣切りがきっかけとなって自滅的テロとも名付けられる無差別連続殺傷事件に及ぶ若者が見られるが、果たして、これらの状況すべては、個人や家庭の責任として片付けられるものだろうか<sup>3</sup>。むしろ、社会全体に他者の痛みを思いやる心が欠如している結果ではないだろうか。

このような日本の現状を、マザーテレサは貧しい人々の側で見つめていた。ノーベル平和賞受賞後に来日した折、マザーは、「あなたの周りにも貧しい人がたくさんいるでしょう。あなたの家庭にも、学校にも、職場にだって、あなたの身近な人にもいるでしょう。それは何かと言うと、自分なんか必要とされていないと感じている人たちです。自分なんてこの世に生まれてきた意味がないと思っている人たちです」<sup>4</sup>と語っていた。また、「今日の最大の病気は、らいでも結核でもなく、自分はいてもいなくてもいい、だれもかまってくれない、みんなから見捨てられていると感じることです」<sup>5</sup>とも話した。その言葉に従えば、会員同士が互いの状態に無関心となり、中絶される胎児を含めれば年に数十万の命を死に追いやっている日本社会の病理はかなり深刻で、その状態はすでに瀕死の重体に陥っていると言えるだろう。

そこで本稿は、多くの人が人間の無力さと限界を悲痛な思いで自覚し、宗教への関心を意識している今こそ、現代にイエスの姿をよみがえらせたマザーテレサを通して、キリスト教信仰が本来、目指すべきであった隣人愛を再考する。50 年以上に亘り、「神はどこに」と問わずにはいられない世界の現実と向き合いながらも、マザーテレサは「神は貧しい人の中におり、人間と共にこの世の苦難を担っているものであり、貧しい人の姿で現れ、人間の愛を待ち望み渴いている」と語り続けた。その視点は、震災の被害によってばかりでなく、格差社会の中で居場所を見失って苦しむ大勢の人々に、社会常識とは全く別の次元からのまなざしで現実を見直す機会を与えるだろう。そして、もし、その使信を信じることができれば、心の奥という深みの次元に神が与える喜びと安らぎを得るであろう。

---

3. 清水康之・湯浅誠著『闇の中に光を見いだす―貧困・自殺の現場から―』（岩波ブックレット No. 780、2010）12、51 頁は本来政治、社会制度、教育の問題であるものを、個人や家庭、企業、学校の責任に押しつけ合っているのではないかと語る。また、片田珠美著『無差別殺人の精神分析』（新潮選書、2009）は、2008 年に秋葉原で起こった無差別連続殺傷事件及び類似する事件の犯人像の分析を行うが、同時に社会の病理が個人に反映されている要素も指摘する。

4. 五十嵐薫著『マザー・テレサ 愛の贈り物』（PHP 研究所、2010）123 頁

5. マルコム・マゲリッジ著沢田和夫訳『マザーテレサ―すばらしいことを神さまのために』（女子パウロ会、1976）94 頁

本論の第一章では、市場原理主義の拡大によって出現している排除型格差社会の中で、自尊感情を持たずに苦しむ日本人の現状と、神の愛の対象として創られている人間の尊厳を語るマザーテレサの視点を述べる。第二章では、創造主である神との交流の中で、神の似姿である人間本来の姿を生きたイエスと、その反映となったマザーの姿を考察する。最後に第三章では、マザーテレサのメッセージに込められた、わたしたちへの招きを考察する。

人間は神の似姿であるというキリスト教的視座に立つ時、20世紀にマザーテレサという一人の人間が登場したこと自体が持つ意義を思わずにはいられない。神はすでに前もってマザーテレサを通して、どのようにして神との関係を回復し、神の恵みによって人間同士の関係や自然との共存を回復すべきか、そのゴールと道標を示しながらわたしたちを招いていると解釈できるからである。この呼びかけをどう受け取り応答するのかは、21世紀を生きるわたしたち一人一人に残された課題であるとしても、彼女の存在は愛の贈り物と言えるであろう。被災地の都市再建や人びとの心的外傷からの回復支援はもちろんのこと、世界的経済危機の荒波に飲み込まれる不安におびえる人びとに、「神の似姿（イマゴ・デイ）」である人間の尊厳」という視座について知らせたい。

## II. 本論

### II. 第一章 日本の貧しさと言語のまなざし

#### II. 1. 1. 日本の家庭の貧しさ

マザーテレサの有名な言葉は「愛は家庭から始まります」というものである<sup>6</sup>。また、世界平和の崩壊は家庭から始まるとも語る<sup>7</sup>。執筆者も同感である。学生たちが抱える苦悩の多くが家族関係に起因することが見えるからである。マザーは、社会の混乱の原因は、大人たちがより豊かになることを追求するあまり、子どもたちと家庭で過ごす時間を喜ばない程に消耗し、互いに愛をもって受容し合う力を失っていることにあると考えている。もちろん彼女は、生活のために働き、身体的疲れや精神的ストレスが蓄積する場合に、家族に優しく微笑むことが困難であることを承知している<sup>8</sup>。しかし、そのような時こそ「苦しむイエスへの愛」を生きる時だと続ける<sup>9</sup>。マザーが生き、そして、人々に求める愛は感情によるものではなく、決意であり、意志である<sup>10</sup>。そして、死や悲しみが満ちる世界に、平和と喜びをもたらすためにも、家庭を子供たちが親から愛し方や祈り方を学ぶ場にする恵みを願い求

6. J・ジャヤ・チャリハ&エドワード・レ・ジョリー編いなますみかこ訳『マザー・テレサ日々のことば』（女子パウロ会、2000）122頁。「愛は家庭から始まります。……もし私たちが互いに愛し合い、愛を私たちの生活に取り戻したいのなら、まず家庭から始めなくてはなりません」

7. 同上、131頁。「…子どもたちのための時間も、お互いのための時間もないあり様です。…世界平和の崩壊は家庭から始まるのです」

8. 同上、29頁

9. 同上、29頁

め、人間自らも努力する必要があると語る<sup>11</sup>。

マザーテレサと交流があり、自らもインドに孤児たちの家を創設した五十嵐薫氏は、孤児には三種類があると言う<sup>12</sup>。一番目は、両親がすでに生存していないという意味の孤児であり、二番目は生存していても経済的、又は別の理由で子どもの養育ができない場合の経済的な孤児の意味、そして、三番目が両親は揃っており物理的環境には恵まれていながら、子供が自分は必要のない人間で生まれてなければよかったと思っている場合の精神的な孤児の意味である<sup>13</sup>。そして、マザーが一番不幸だと言うのが、三番目の精神的な孤児であり、それは日本の場合、大人にも当てはまる<sup>14</sup>。そして、マザーが来日した折に日本人に求めたことは、家庭、学校、職場などの社会において、仮に実際にはそうでないとしても、本人がそう思いこんでいる人がいたならば、その人たちに向かって、「あなたを愛している」と伝えなさいということであったと解釈する<sup>15</sup>。

当時のマザーの願いは、遠く離れたインドにボランティア活動に出かけることではなく、今、すぐにでも実践できる愛、すなわち、各自の身近な人々の中で愛を必要としている人のために、自分には何ができるのかを考え、行うことであった。このように語るマザーテレサの目には、日本は非常に貧しい人々が多い国に映っていたからである。

世界の国々の子どもたちに比べ日本の子どもの低い自尊感情が問題とされているが、執筆者は日本の大人たちも自尊感情が抱けずにいるのではないかと考える<sup>16</sup>。児童精神科医の古荘純一氏は、日本の子どもの自尊感情の低さの原因の一つに、その子どもの親自身が自尊感情を高めることができないままに大人になり、親となっている可能性があることを指摘する<sup>17</sup>。子どもは主に、母親や父親が自分をどう見ているかによって、自分自身の価値を押し量っていることが多いにもかかわらず、親自身が自分の自尊感情の低さをその子どもに投影して否定的なメッセージを送り続けるために、子どもは何かができないのは自分が悪いからだと思込み、自分を肯定できず自尊感情が低くなるという構図が新たに生じている<sup>18</sup>。

ただし、そのような親世代もまた、社会の変化の影響を受けて自己概念を形成したのであ

- 
10. ジョゼフ・ラングフォード著里見貞貞訳『マザーテレサの秘められた炎』(女子パウロ会、2011) 202 - 205 頁。及び、エーリッヒ・フロム著鈴木晶訳『愛するということ』(紀伊国屋書店、1991) 90 頁:「誰かを愛するというのは、単なる激しい感情ではない。それは決意であり、決断であり、約束である。」
  11. J・ラングフォード、前掲書、317 頁
  12. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、127 頁
  13. 同上、127 - 128 頁
  14. 女子パウロ会編三保元訳『愛-マザー・テレサ 日本人へのメッセージ』(女子パウロ会、2003) 98 頁。マザーは「国が豊かなほど、そのような人びとが多い」と言っている。
  15. 同上、128 頁
  16. 土井隆義著『キャラ化する／される子どもたち-排除型社会における新たな人間像-』(岩波ブックレット 759) (岩波書店、2009) 57 頁は、日本青少年研究所 (2008) の調査で中高校生の過半数が「自分はダメな人間だと思う」と回答したこと、読売新聞の全国青少年アンケート調査 (2003、2006) 結果に対し、斎藤環氏が「学習や修練によって自分が変わるという期待すら存在しない…「確固たる自信のなさ」が若者に蔓延すると指摘したことを記している。
  17. 古荘純一著『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』(光文社、2009) 111 - 116 頁
  18. 同上、112 頁

り、自己肯定感や自尊感情の問題は、結果として個人の責任に帰す事柄とは言えない。むしろ現在、子育て中の親の多くは、自分たちが子供時代に抱いていた幸せの図式が、バブル崩壊後の社会情勢の中では機能しなくなったことで自信を失い、先行きに不安を抱え込んでいのが実情である。すなわち、彼らが子ども時代を過ごした 1970 年代～ 1980 年代の日本社会は、高度経済成長期から安定成長期にあり、当時の親世代は物質的豊かさを求めてがむしゃらに働くことで、子どもの将来に自分たちの夢を託せると期待できた。しかし、1990 年代の金融破綻後の不況社会では、それまで安定を象徴していたような大企業の倒産が相次ぐなど、社会の中の見かけと実体のずれが露呈されたため、その時期に青少年期にあった現在の親世代は、彼ら自身が描いてきた幸福観の変更を余儀なくされる事態に戸惑い、将来を見通せないことで不安になり、自信を喪失しているのである<sup>19</sup>。

福島原発事故を通して「安全神話」の虚偽が判明した今、日本全体が更なる自信喪失に陥る可能性があるが、マザーテレサはすでに 30 年前に問題の原因が、社会の人のびとの愛の欠如にあることを指摘していた。執筆者は次のように考える。敗戦によって致命的なダメージを受けた日本人の自尊感情は、物質的な富の獲得や経済力による世界的地位の向上によって補償されたかに見えていたが、実際には、抑圧された感情として次世代に投影され、受け継がれていたのではないだろうか。人間の自尊感情は本来、何に基づいて形成すべきなのか。それらは、自分の外的要素に関する他者からの評価や判断に基準を求めるべきものであるか。マザーによれば、それらは自己の内奥において、まずは「神によって愛されていること」に基づいて自己を肯定することから始まり、その安心感をもって身近な人々との間に家族的な親密性を生きる体験を重ねる中で、安定感の核として得られるものである。

## II. 1. 2. 日本社会の貧しさ

森一弘司教は自殺者年間 3 万人以上という日本は 10 年で 30 万人の死者が出る内戦をしているのと同じと語ってきた<sup>20</sup>。一方、中絶数が年間 30 万件以上にも及ぶこの国の戦争には武器はならず、むしろ、社会の成員一人一人の言葉や態度に浸透する価値観が、互いの存在を生きる営みから遠ざけ、傷つけ合っている。

自殺対策に取り組む清水康之氏は、今の日本社会を評して「野生の王国」<sup>21</sup>であると言う。なぜなら、人が生きるための前提になる環境を整えるのは、本来であれば、社会全体の責任であるはずだが、その共同責任の部分までも、自己責任として個人や家庭に押し付け、国民一人ひとりの生存の確保を保障する国の責任を回避しようとする声が強いからである。また、自殺の問題は、個人の問題以上に社会構造の問題であることを指摘し、毎年の自殺者数

19. 古荘純一、前掲書、113 頁

20. 森一弘著『人が壊されていく日本社会と人のありようを考える』（女子パウロ会、2009）43 頁は、40 年間で 100 万人以上と記す。

21. 清水康之・湯浅誠、前掲書、58 頁

が大きく変化せず、コンスタントに3万2000人から3万4000人の間を推移している現象は、社会の中にそのような数の落とし穴が常態的に存在し、穴に落ちた人、落とされた人から亡くなっている状態であると説明する<sup>22</sup>。そのため、転落者を救い出す策ばかりでなく、穴を作り出す社会の仕組みを検討し、穴を塞ぐことや穴に落ちないようにセーフティーネットを充実させる対応が求められると主張する<sup>23</sup>。同様に、反貧困対策に取り組む湯浅誠氏も、日本は、社会システムや政治の問題であるものを、自己責任を強化することで、家庭や個人の問題にすり替えている現状を批判している<sup>24</sup>。

執筆者も両氏の見方に賛同する。しかし、その一方では、社会に存在する貧しさへの対応には、マザーテレサの姿勢を学ぶことも必要であると考え。マザーは自分の使命は、社会の問題の原因を分析し、責任の所在や対策を検討し、担当者を決定することではないと言い切る。人にはそれぞれ神から託された使命があり、マザーとその修道会の会員は、どのような状態にある人であっても、一人ひとりをキリストが命を賭けて愛した命として、また、キリストご自身として愛し仕えることに徹すると定めていた。実際、マザーテレサが活動の初めに奉仕した多くの人々は、カリガートの「死を待つ人の家」へ運び込まれた後、わずかな時間で命を終えるのであるから、マザーには、委員会を招集し、データを分析した上で解決策を練る暇はないのである。しかし、時間の問題ばかりではなくマザーが貧しい人々を見つめるまなざしそのものが、通常の人々とは異なることも事実である。その違いは、マザーが、もはや手の施しようもない瀕死の状態にある人でも、その場において最善の奉仕を惜しまないことに示されている。また、マザーの「わたしは、彼女の病気を救いたいのではありません。彼女が最期を迎えるときに、『自分は愛された。大切にされた』という思いで天国に帰ってもらいたいのです」<sup>25</sup>という言葉にも示されている。

マザーテレサは、貧困を救うのではなく人間の魂を救おうとしている。そのためには、仮にその人の死の運命は変えられないとしても、その魂が、誰にも看取られず、孤独のままに最期を迎えることのないように心を配る。マザーはこの世の誰ひとりとして、いない人はいないのだという強い信念に基づいているため、見捨てられたという思いを抱えたまま、この世を去る人がいないように努めるのである<sup>26</sup>。最期の瞬間にマザーと出会いそのまなざしの中の愛に触れただけで、自分は神に愛され、見捨てられてなどいなかったと知って、喜びと感謝の心で神の元へ旅立った人々の数もまた数えきれない。人間にその魂を満たす平安を与える方法は、その人の存在を肯定し、喜びと尊敬に満ちた愛をもって世話をする人に出会うことだとも言える<sup>27</sup>。

---

22. 清水康之・湯浅誠、前掲書、4、57頁

23. 同上、57頁

24. 同上、4、13頁

25. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、121頁

26. 同上、121頁

27. マルコム・マゲリッジ著、前掲書、120頁

「野生の王国」化した日本の社会構造がより人道的なものに変革されるように要求し、社会的に行動することは尊く気高い。しかし、同時に、一般市民一人ひとりが人間存在自体を、どのようなまなざしで見るとするのか、その視点を問い直し、修正することも大切であると考えている。執筆者はマザー同様、修道者という身分にある者だが、属する修道会が「教育者として福音化の使命を実現する」<sup>28</sup>ことを目的に創立されているため、日本社会に見られる現象をキリスト教の視点から解釈することや、逆に、体験によってのみ把握可能な宗教的次元の事柄を、伝達可能な言語に翻訳することも使命の一部と考える。そのため、マザーテレサの霊的次元を解説し、彼女を導いた啓示の光が、危機的状況に直面している現代日本社会をも照らし、人びとを救いへと招いていることを提示したいと考える。

### II. 1. 3. マザーテレサのまなざし

マザーテレサが「貧しい人々中の最も貧しい人々に仕える」活動に着手したのは、1946年9月10日に体験した啓示に原点がある<sup>29</sup>。啓示は、ヨハネ福音書19章28節の記述にある十字架上のイエスが、“I thirst”と言って現れたというのである。その出現は彼女の人生を大きく変え、その後の人生を導く光源となった。同時に、彼女はマタイ福音書25章40節「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしてくれたことなのである」の言葉を現実的に把握し、人間一人ひとりにはキリストご自身であるという視点を信仰の核に据えて活動した<sup>30</sup>。マザーは、貧しい人々への奉仕がそのままその人の中で渴いているキリストの渴きを癒す奉仕となると確信していた<sup>31</sup>。

五十嵐薫氏は、マザーは、決して貧しい人や病気の人をかわいそうな人と憐れむことはなかったと伝えている。むしろマザーは彼らを神様に選ばれた人々、特別に愛されている人々、イエス・キリストそのものと考えていたと語る<sup>32</sup>。マザーのまなざしには、貧しい人や病を背負う人は、イエスが姿を変えて（disguise）近づいて来る姿に見えるのであり、そのため、愛すべき人、奉仕すべき人、礼拝すべき人と映るのである<sup>33</sup>。従って、世界中で貧困の中に餓死する人々がある状態に対しては、「神がその人たちのことを気にかけていなかったからなのではなく、あなたやわたしが彼らにパンを与え、着るものを与える神の手の愛の道具にならなかったからです。キリストが再び、空腹な人、孤独な人、ホームレスの人に姿を変え

28. 聖マリア修道女会『会憲』第II、会則2-1

29. 五十嵐薫著『マザー・テレサの真実』145-148頁。工藤裕美・シリル・ヴェリヤト著『宣教師マザーテレサの生涯』、141-143、338-344頁

30. 五十嵐薫、『マザー・テレサの真実』、189-190頁

31. ルシнда・ヴァーディ編、前掲書、181頁に「私たちの目標は、十字架の上のイエス・キリストの無限の渴きを、愛にあふれた魂によって癒すことです。私たちは、貧しい人のなかにいるイエスに仕えます。私たちは彼らを看護し、食事を差し上げ、服を着せ、彼らのもとを訪ねます」（会憲より）とある。

32. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、82頁

33. 同上、154頁

てやってきたのに、私たちは気付かなかったのです」<sup>34</sup>と語る。つまり、飢えや貧困は神の意志ではなく、そうした状態をゆるし、分かち合おうとしないわたしたち人間の愛の欠如の問題だと言うのである<sup>35</sup>。

神に責任をなすりつけて、たいへん無慈悲な神であるということは、自分自身が無慈悲であることの口実に使うということもあるでしょう。これはわたしたちの責任じゃないと、神がこういうことを許しているのだというふうに言って、わたしたち人間が責任を回避し、貧しい人々に分かち合わないことを、他から咎められないようにするのです。<sup>36</sup>

マザーは罪もない無垢な人が社会の犠牲となって死んでゆくことを、最も清いイエス・キリストが十字架に架けられて死んだことと重ねて見ている。その人々を憐れむのではなく、世界の罪を背負い、償ってくれている人びととして受けとめていた。

天国に行ってはじめて、わたしたちが、貧しい人々に大きな借りがあるということに、気づくでしょう。神様をもっとお愛しすることができるようにと、とりわけ貧しい人々が助けてくれたということに。<sup>37</sup>

マザーの目には、人間はあくまでも神によって創られた神の子であり、その似姿（イマゴ・デイ）の完成にまで成長する神の「いのち」を宿した尊い存在、しかも、イエスが命を賭けて愛し、今も、その愛による応答を渇くほど待ち焦がれている「生きた魂」に見えるのである。

## II. 2. 神の似姿である人間の尊厳

### II. 2. 1. マザーテレサを導いた光

神の愛の宣教者会の司祭であるジョゼフ・ラングフォード師は、マザーテレサが望んだことは、貧しい人たちに神から与えられた人間の尊厳の充満を反映させることであったと語る<sup>38</sup>。しかも、その手段は、自身の表情と声と触れ合いを通してであり、彼女と出会うことだけで、貧しい人びとが神にとって貴重で、最も大切な人であり、彼らが神に望まれていることを示すことであった。マザーはわたしたち人間は誰であれ、自分の存在が誰かにとって、しかも、生ける神にとってどれほど大切であるかを認識しさえすれば、その魂の中に刻まれた尊厳そ

---

34. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、154頁。他に、三保元訳『愛—マザー・テレサ 日本人へのメッセージ』154—155頁

35. 三保元訳、前掲書、154—155頁

36. 同上、155—156頁

37. ヴォルフガング・バーダー編山本文子訳『マザー・テレサ100の言葉』（女子パウロ会、2009）№100

38. J・ラングフォード著、前掲書、164頁

のものが開花に向けて働き始めることを確信していた。人間の弱さと失敗にもかかわらず、神から与えられた尊厳は、生来のもの、不動のものであって、人間のいかなる悪用によっても失われることはなく、たとえどんなに傷つけられても消滅させることはできず、神の愛にふれることで瞬時に回復するからである<sup>39</sup>。

人間の本質をどう理解するかという問題において、マザーは、すべての人間は「神の似姿」として創られたことに由来する尊厳を持つと確信していた。それは、カトリック教会がそう教えるからではなく、彼女に現れた啓示の光がそう確信させたのである。神は見えない存在であるから、神の似姿である人間の尊厳も物理的な次元の事柄ではなく、精神的・霊的な次元の事柄であり、すなわち、自由や愛や霊において神の似姿となるべく創られた存在である。従って、マザーにとっては、祈りと生活のすべては心の問題であった<sup>40</sup>。「小さなことに大きな愛を込める」という有名な言葉は、愛は外面的に測られるものではなく、目には見えない心の深さ広さとして感知されることを示している。神は愛であり霊であるから、人間も感覚的・感情的な面より、もっと深い、存在の中心という領域から湧き上がる愛を生きる可能性が与えられている<sup>41</sup>。

マザーテレサを導いた啓示の核心は、人間の魂に飢え渴く神の本性に関する啓示であり、人間は自身の魂の深みにおいて、神に顔と顔を合わせて出会い、その神性の内奥に入って一致できるという神秘である<sup>42</sup>。毎日の祈りを通してこの神秘的な一致を実践していたマザーにとっては、人間の魂は神が宿る神聖な場であり、たとえ本人にその自覚がなくても、その魂における神の存在は常に現実のものであった。マタイ福音書 25 章 40 節の “You did it to me (それはわたしにしてくれたことなのである)” は聖書の文字としてではなく、マザーやその協力者たちが、奉仕する人々の魂から現実的に聴き取ることができた神の言葉である。

五十嵐薫氏が企画するボランティアツアーの参加者の一人は、このようなイエスとの出会いを象徴的に体験している<sup>43</sup>。施設で右目の眼球を失った老人の食事の介護を担当していたその人は、脳裏に浮かんだ「最後の晩餐」のイエスの姿に導かれるようにして、その老人の前にひざまずき食事の世話をしているとき、老人の、眼球がない方の右目から涙が溢れていることに気がついた。しかし、不思議にも健康な左目は泣いていないのである。その流れる涙の中に輝くような光を見たとき、彼は、「この老人は、人間の姿を借りた神様ではないか」と感じると共に、こらえ難い嗚咽が込みあげてくるという体験をした。マザーが、神であるイエスは、貧しい人の姿をとって今もわたしたちに近付いて来られると語ることの真実性を体験的に理解した人々もまた、数知れないほど存在するのである<sup>44</sup>。

39. J・ラングフォード、前掲書、164 頁

40. 同上、252 頁

41. 同上、253 頁

42. 同上、251 頁

43. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、31 - 32 頁

44. 三保元、前掲書、106 頁

## II. 2. 2. 人間に渴く神の啓示

マザーテレサが十字架上でイエスの渇きの叫び（ヨハネ 19・28）を通して理解したことの中で、現代に重要な意義を持つことは、イエスがその人間的・身体的渇き以上に、わたしたちとの一致を望む、より深い「神の渇き」を啓示しているという確信である<sup>45</sup>。この「人間に渴く神」という神理解が現代に与えられたことの意義を、ラングフォード師は、「世界の愛が冷え切っている現代であるから」、または、「人間が組織的にも全体的にもこれほど神を拒否したことは歴史上なかったから」と語る<sup>46</sup>。執筆者も同感である。人間の遺伝子解析技術は革新的な発展を遂げ、ヒト胚実験、着床前診断など、現代ほど人間の生命が人工的干渉の脅威に晒されている時代はない。

全能永遠の神が被造物にすぎない一人ひとりの愛に渴くなどという、通常では違和感のゆえに無視されかねない内容のメッセージでさえも、誰もがイエスの生き映しと認める人生を生きたマザーテレサの言葉として受け取るとき、信憑性を帯びて響くものとなる。そして、このメッセージこそが、真実な愛に飢え渇き、様々な依存症に苦しむ現代人の魂を癒す救いの福音になるのである。

マザーの確信は「神は人間との間に愛し愛される関係を望んで人間を神の似姿に創造されました」という従来の表現をはるかに超えた、「神は焼け付く砂漠が水を切望するような熱情をもって、人間一人ひとりの愛を求めておられる」<sup>47</sup>という意味である。そして、その神は人間の魂を神殿として住まわれるので、どこにいても交流が可能であり、しかも、その愛に渴く神は苦しむ隣人という触れることのできる形で近づいて来られるので、顔と顔を合わせて接することができる<sup>48</sup>。また、その神は、わたしたちの最も小さな愛の行為でさえ、ご自分のためになされた行為として「ありがとう」の心で受け取ってくださるというのである。

従って、マザーが現代世界に与えた最大の貢献は、神のイメージを変えたことである。父である全能の神が、困っている人びとの中でわたしたちを待ち、慰めを求める人びとの中でわたしたちを切望し、寂しさを感じる一人ひとりの心の中でわたしたちに寂しさを感じておられるというのである<sup>49</sup>。そのためマザーは、それを聞き、信じ、神と出会うため、神に愛され愛するために「行って同じようにしなさい」とわたしたちに教えるのである<sup>50</sup>。

## II. 2. 3. 「ネフェシュ・ハヤー（生きる魂）」である人間の啓示

マザーテレサが理解した神の渇きに関する教えの、更に、重要なポイントは、神がわたし

---

45. J・ラングフォード、前掲書、356頁

46. 同上、349－350頁

47. 同上、278、351頁

48. 同上、351頁

49. 同上、351－2頁

50. 同上、前掲書、172、351頁

たちの愛に渴くのは、「わたしたちのため」であるという点である。マザーは「神は、わたしたちが神に渴くために…わたしたちに渴いておられる」<sup>51</sup>と語る。それは、わたしたち人間の癒し難い渴きが、本来は神への渴きであることをわたしたちに自覚させ、神の渴きに応答する意志において神と一致するよう招くために、神が前もって整えられ、啓示された神秘である。この人間が神に渴く存在として創られたことは、聖書に記された人間像にも合致する。

創世記2章7節には、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と記述されている。ここで「生きる者」と訳されている語は「ネフェシュ・ハヤー」である。このヘブライ語の「ネフェシュ」には、のど、欲望、切望、心、いのち、魂などの意味がある。遊牧民であったヘブライ人は、もともとは水を求めて渴く身体的器官としての喉を指す言葉を、神を求める人間の思慕を表す言葉として用いるようになった<sup>52</sup>。そして、やがて生きることやいのちへの激しい欲求をもっていながら、その実現の手段は自分の手にはなく、自己を越えたものに委ねる以外に仕方がない人間存在のあり方としての「魂」を描写する表現としたのである<sup>53</sup>。ただし、ギリシャ思想のような霊肉二元論的な人間観ではなく、身体と結びついて生きる人間全体の、それを満足させられなければ、もはや生きているとは言えないような、或いは、その欲求が充足されないなら、その人が自分自身になりきれない、そういう渴きを抱えた人間の本質を表す表現が「ネフェシュ・ハヤー」である<sup>54</sup>。

その意味で、十字架上で渴くキリストは、その「ネフェシュ・ハヤー（生きる魂）」としての人間になりきった神の啓示であり、人間が抱える渴きに一致した神の姿である。しかも、そのイエスは再び神の息吹（霊）によって新しい人として復活し、神の生命に入れられたのであるから、愛に渴く人間存在は神によって受容されている。にもかかわらず人間は神を求めない。そして、求めないがゆえに、その渴きは癒されることがない。そこで、神はマザーを現代に遣わし、本来神を求めるよう創られているにもかかわらず、神を求めない人間への呼びかけの声としたのである。

マザーは「すべての人間は神を渴望する」<sup>55</sup>と断言する。そして、神に対するこの渴きが、人間の幸福と尊厳の基礎であると理解した<sup>56</sup>。J・ラングフォード師は、人は本性によって肉体を備えた渴きであり、一人ひとりの人間は神を望むために創られていると語る<sup>57</sup>。そして、わたしたちは本質的に、自分たち以上のものに渴くために創られた願望の存在であると説く。しかも、人間のこの本質的な願望は、それが認められず無視され続けると、その不満

51. J・ラングフォード、前掲書、314頁。注136 Mother Teresa, *Message to Youth in Dallas* (May 23, 1992)とある。

52. 同上、358頁

53. 雨宮慧著『旧約聖書のこころ』（女子パウロ会、1989）106－110頁

54. 同上、111－112頁

55. J・ラングフォード、前掲書、301頁注132 Mother Teresa's *Instructions to the M.C. Sisters* (April 16, 1981)

56. 同上、304頁

57. 同上、301頁

が歪んだ渇きや失望という癒し難い貧しさをもたらすことをマザーは見抜いていた<sup>58</sup>。先進諸国に見られる人々の内的な渇きは、得体の知れない不安や何をもってしても満たし得ない空しさを嘆く魂の叫びとなってマザーの耳に届いていたのである<sup>59</sup>。

マザーは、人間の最も大きな苦しみは弱さや貧しさ自体ではなく、それらゆえに自分は役に立たない、価値がない、評価されない、愛されないと感じることでであると語った。しかし、同時にその原因が、その人個人にではなく社会に広がる価値観の中にあることを認識していた。現代文化には、あたかも神のような絶対的力があって「美しいものだけが、賢いものだけが、役に立つものだけが愛される」と繰り返し、更にその奥には、真の神の愛を拒絶しながら、自分たちは神の愛から拒否されていると勝手に思い込んだ人間のエゴが、神無しに自分の渇きを満たすための手段を神として仕立てて、必死に仕えようとする罪の構造が、現在していることにもマザーは気づいていたのである<sup>60</sup>。

真の神から遠ざかる一方の現代人に、本当に渇いている対象は何か、しかも、その渇きを本当に癒すことができるのは誰かを示すために、改めて十字架上で渇くイエスがマザーの目の前に啓示されたのである。それは父なる神が、人間の渇きを癒し、神の似姿本来の在り方を回復させることを今も、切望しておられることを示すためである。

## II. 3. 神の似姿（イマゴ・デイ）の尊厳回復への招き

### II. 3. 1. 神の渇きと人の渇きの一致

マザーの証しは神を愛することが、自らが神に渇く人間の一人となり十字架上で渇く者となるまでに<sup>61</sup>、人間と一致した神であるキリストを愛することであり、今も貧しい人々の姿をとって、わたしたちの身近に存在しているイエスを、尊敬し、愛し、奉仕することであると教える。そして更に、その神に触れることで魂は平安を得られることも証した。真実な愛に飢え渇く現代人のために神が「渇く者」となって近づいて来られるのは、その人自身の愛を求める渇きの中で癒そうとされるからである。

神がマザーに啓示したことは、十字架上で渇くイエスにおいて、神と人双方の渇きが一致し、変容することである<sup>62</sup>。イエスは「神」として人に対する神の渇きを啓示すると同時に、「人」として神に対する人類の渇きを啓示している。そして、この神と人との一致において復活という変容が、新しい創造として起こるのである<sup>63</sup>。

マザーテレサが「霊的暗夜」を経験していたことは、広く知られるようになった。しかし、

---

58. J・ラングフォード、前掲書、304頁

59. 同上、305頁

60. 同上、344頁

61. フィリピン人への手紙2章6節

62. J・ラングフォード、前掲書、315頁

63. コリント人への第二の手紙5章17節

その神秘的一致を生きる霊性が、現代人にとって意義深いものであることについては、まだ理解されていないのではないだろうか<sup>64</sup>。キリスト教が説く神秘的一致は、グノーシス主義のような人間の神的本性の覚知でもなければ、新プラトン主義のような神性との融合的合一とも異なる。それは、人格的一致と呼ばれ、意志における一致、自由な決断によって神の意思や愛（アガペー）に対する従順のゆえに自己から出て、神による変容を受けることである<sup>65</sup>。マザーは、その生涯にわたる霊的暗夜の中で、神への強烈な憧れや思慕に苦しむこと、つまり、神に渴く魂の痛みを現実として体験し続けた。しかし、同時に、その人間としての渴きを十字架上のイエスにおいて神の人間への渴きに一致させることを実践し続けたのである。そのため、感情的には暗夜を経験しながら、周囲の人びとは彼女に悲愴感を見ることはなかった。むしろ、日々の祈りと日常の各瞬間において、神へのその思慕を、神のマザーへの思慕へと一致させる入口にしていた。そのため、彼女に出会う人びとは、彼女から溢れるほどの神の愛を受けるといふ不思議が起こっていたのである<sup>66</sup>。彼女は「神の愛の水門」や「天の門」と呼ばれ、「神がこの世界の傷に触れるための入り口」とも言われている。

こうして彼女は、神の思いと人間の思い、神の望みと人の望みを合わせることで変容が起こることを示した<sup>67</sup>。わたしたちに渴く神の望みは、すでに実在しているのであるから、神とわたしたちの一致が実現するために必要なことは、ただ、わたしたちが神を意識的に思い、自覚的に、その思いや望みに自己の思いや望みを合わせることだけである。

この神秘的一致については、門脇佳吉氏による『霊操』の解説が参考になる。氏は霊操の「三組の人」においてイグナチオが目指す境地を、「自由に基づく醒めた神秘主義」と表現し、禪が目指すところの「愛着や執着への放棄を通して生ずる自由闊達な境地」を更に一歩進めた自由の境地であると解説する<sup>68</sup>。すなわち、イグナチオにおいては、「神が霊操者の心を動かし」「神の奉仕と讃美のために」一層よいと思われるものを示して下さるので、それに従って、財産を望んだり望まなかったり、自由に選ぶことができるという、「神と人間が同じ一つのことを望み、両者の全き一致を実現する自由」が最も大切なのである。この解説をマザーに当てはめるとき、マザーが慰めのない霊的暗夜の中で、神の望むことを自分の心からの望みとして望み、一致させて生きたという事実は、キリスト教が目指す神秘的一致を理解する上で重要な視点を与える。確かにマザーは、啓示の時にはイエスや聖母マリアを Real Living Person（現実には生きている存在）<sup>69</sup>として出会う賜物を受けたが、しばらくするとともにその恵みは影を潜め、生涯にわたって霊的荒みの状態に苦しんだのである。従っ

64. 宮本久雄著「神秘的一致」大貫隆／名取四郎／宮本久雄／百瀬文晃編『岩波キリスト教辞典』（岩波書店、2002）436頁

65. 同上、436頁

66. J・ラングフォード、前掲書、316頁

67. 同上、317頁

68. イグナチオ・デ・ロヨラ著門脇佳吉訳『霊操』（岩波書店、1995）160－161頁。霊操155番

69. 五十嵐薫、『マザー・テレサの真実』、199、200、203頁

て彼女の活動を支えたのは、あくまでも日々自己の意志を自由に神の望みに一致させ、貧しい人々の中におられる十字架上のイエスに仕えるという最初の決心に留まろうとする愛の忠実さであった。神の恩寵は決して人間の自由を束縛するものでも麻痺させるものでもなく、あくまでも、人間が自らの意志の自由を保ちながら神を愛することを望み、支える中に存在する。マザーテレサにとって祈りとは、日々、十字架上のイエスに一致すること、すなわち無となられたキリストのケノーシス<sup>70</sup>に倣い、神の恩寵が全面的に開花する場に自ら入ることであり<sup>71</sup>、復活においてイエスの上に実現する新しい人間の創造を起こす神秘を受け入れることである。

マザーは一日5分でもよいから祈ることを勧めた。祈ることで自分の心と思いを神に向け、神が自分に渴いていることを意識し、神のその思いに自分の思いを合わせる方向へと歩みを進められるからである。また彼女が、精神的孤児の心性を抱えることが最大の病気であると認識した上で、人びとを他者への奉仕に誘うのは、人が自己の苦しみのみに埋没することなく、心を他者の思いに開かせるためであり、直接には、神を求めない人であっても、他者の中に存在する神と出会い、その神の思いとの一致を通して、変容の恵みが働くことを体験させるためである。五十嵐薫氏は、長年にわたるボランティアツアーを通して得た「人間は他の命に仕えるとき自分の命が最も輝く」<sup>72</sup>という信念を繰り返し語っている。

### II. 3. 2. 「神の似姿」の完成であるイエス・キリスト

キリスト教はイエス・キリストは「真の神、真の人」であると定義し、神性と人性が子なる神の位格（ペルソナ）において一致しているという「位格的一致」の教義を有する<sup>73</sup>。この一般には理解されにくい表現について、執筆者はマザーの霊性に照らして考察するとき、解説が容易になると考える。すなわち、イエス・キリストの位格における神性と人性の一致とは、マザーに示された十字架上のイエスにおいて「神の渴きと人の渴き」が一致していることに当てはめることができる。また、位格（ペルソナ）における一致という表現は、イエス・キリストは人の子（人性）としての「思いや意志」を、先にあった神の子（神性）としての「思いや意志」に一致させたことに当てはめることができる。すると、そのような自由意志と愛による従順を通して神と一致したキリストの人性に、人間性において結ばれる個々人が、「キリストにおいて (ἐν Χριστῷ)」神と和解でき、新しい創造を受けて神の永遠の命へと迎えられると考えることができるからである<sup>74</sup>。

70. フィリッピ人への手紙2章6－11節

71. 門脇佳吉、前掲書、267－268頁。荒みについての解説参照。

72. 五十嵐薫、『マザー・テレサ 愛の贈り物』、7頁

73. 岩島忠彦著『イエス・キリストの履歴』（オリエンズ宗教研究所、2011）219頁。451年のカルケドン公会議の教義決定までの経緯説明参照。

74. コリント人への第二の手紙5章11－21節。キリストにおいて神との和解が実現する。

カトリック教会は、このイエス・キリストこそが、天地創造のはじめに神が人間に期待した「神の似姿（イマゴ・デイ）」の本来の姿であり、完成された姿であり、個々の人間が目的として求める将来の姿であると教える<sup>75</sup>。すなわち、キリストはその受肉と死と復活によって、人間における「神の像」をその本来の姿に回復し、人間が「キリストによって、キリストと共に、キリストの内に」自己の意志を神の意志に一致させるときには、神から注がれる聖霊の働きによって変容され、神化されるための秘跡的原型としての、最終的アダム（人）となったのである<sup>76</sup>。

マザーテレサは、目の前に現れた渇くイエスの姿の中に、神の本性は愛への熱情と一致を望む渇きであると悟った。そして、その神人イエスからの一致の招きに応える中で、自己を捨てて無となりその無から新たに創造される新しい人を着た「神の似姿」の反映を回復したのである。彼女の書簡は、「霊的暗夜」に導き入れられた葛藤を語るだけではなく、同時に神に渇く愛と信心と情熱、そして、貧しい人々に連帯して苦しむことの決意、また、そうすることによって、魂の内奥で沸き上がる感情を超えた喜びを語っている<sup>77</sup>。このことは、カトリック教会が教える、人間はキリストに似たものとされることを通じて成長し、また、聖霊によって、特にさまざまな秘跡を通じて、キリストの姿に似せて造り変えられてゆくという人間観の実現であり、人間自らがその姿を目指して努力するように勧めることの真実性の証しであり招きであると言える。

### II. 3. 3. 現代社会とマザーテレサの呼びかけ

#### II. 3. 3. 1. 神の似姿というアイデンティティ回復への招き

マザーテレサが受けた啓示の中核には、愛し愛されたいという神の熱情と、人間との一致を求める神の無限の渇きの神秘が燦然と輝いていた。マザーが神の渇きに自己の渇きを一致させればさせるほど、その姿は神の似姿の本来的・最終的完成であるイエスの姿へと変えられていった<sup>78</sup>。愛における神秘的な一致による変容、それが、執筆者が考える神の似姿としての人間のアイデンティティである。すなわち、自己を誰（何）と同一であると認識して生きるのかという課題において、日々、よりイエスに似た者となることを選び続けることで結実する、その人に固有の人格の発現という意味である。

これまで述べたように執筆者は、マザーが示した人間の召命と救いに関する啓示の真実性と、その福音が現代人にも十分に妥当する普遍性を確信しているが、他方、このメッセージ

75. 教皇庁国際神学委員会著岩本潤一訳『人間の尊厳と科学技術』（カトリック中央協議会、2006）42 - 45 頁（52 項 - 55 項）

76. 同上、44 頁、54 項参照

77. J・ラングフォード、前掲書、278 頁。ここでの「熱情」とは、聖書における「実存全体をかけて一心に捧げる熱意、または、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くす熱心さ」というように定義できる。この後の「情熱」や他の「熱情」においても同様のことが言える。

78. 同上、278 頁

を説明する言語が、現代の若者に通じるか否かについては不安を抱いている。なぜなら、現代社会はすでに長い間、宗教に関する言葉を受け付けないという宗教的ニヒリズムの時代を過ぎてきたため、その間に、人びとには精神的空洞化が起こり、霊的領域に関する用語の指示内容を共有する社会的基盤は失われ、同時に世代間、個人間における理解の仕方には大きな違いが生じていると考えるからである。

確かに近年、世界的なニューエイジ運動の影響のためか、日本でも、スピリチュアル・ブームが見られる。江原啓之氏等の「スピリチュアル・カウンセラー」と称する人びとがメディアに登場して人々の悩み相談に答える番組や、「宇宙生命」や「宇宙の波動」を取り入れた人性指南書が人気を呼ぶという現象が起こった<sup>79</sup>。しかし、精神科医の香山リカ氏の説明によると、このスピリチュアル・ブームに乗る人びとの心理状態については懸念がある。香山氏は、従来の宗教が人間の利己主義を戒めて利他性と修養を称揚し、社会性を重んじる性質を持つのに対し、現在のスピリチュアル派の人びとには、強い自己へのこだわりと非歴史的で内向き志向が見られるという<sup>80</sup>。また、気分的・感覚的に即効性のある現世利益を求める傾向が顕著である<sup>81</sup>。更に中には、最早、信じる対象の真偽や正邪を問うための論理性や科学的実証性を必要としないばかりか、かえって、真偽にこだわる人は心が狭いと評する者までであるという<sup>82</sup>。彼らには、科学的に検証された言説よりも、「楽しいかどうか」「自己肯定感を高められるかどうか」「前向き思考で希望を持てるかどうか」<sup>83</sup>が重要であり、望ましい心理的影響を受けて楽観的な気持ちになり健康や幸運をつかめるならば、たとえ暗示効果に過ぎないもの、延いては、多少のごまかしや改竄があるものに「騙されても良い」、むしろ「騙してもらいたい」というほど、非合理的な事柄を受容してしまう傾向があるという<sup>84</sup>。

香山氏も指摘するとおり、執筆者はこの現象の背後には、オウム真理教事件によって表面化したにもかかわらず、無理解未解決のまま社会に浸透した孤独感や空虚感の問題が存在すると考える<sup>85</sup>。自己責任論を伴って競争を激化させる風潮が、本来であれば社会的・政治的問題に還元されるはずの問題までも、個人や内面に限定して追究する心理を煽っている。物質と便利さに溢れ、個人主義的価値観が強化された社会の中で、孤立無縁を痛感する人びとの心は、生の充実感に渇き、最早、自分が何を求め、何に悩んでいるのかさえ分からぬまま、刺激的情報に翻弄され力を消耗していると言える。

また、そのような大人たちに育てられた若者たちの中には、過剰なストレスを排除するた

---

79. 香山リカ著『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』（幻冬舎、2006）18頁。天外伺朗著『ここまで来た「あの世」の科学』（祥伝者、2005）

80. 香山リカ、前掲書、109、111、113頁

81. 同上、172 - 5、73、79頁

82. 同上、146頁

83. 同上、109、165頁

84. 同上、148、155、159頁

85. 同上、134、138頁

めに、小さな“イヤなこと”にでさえ、知覚や記憶、意識を切り離す方法で対処し、日常的な葛藤や悩み、感情の起伏を回避して生きる術を身につける人びとが増加している<sup>86</sup>。つまり、通常は連続しているはずの自己意識を、場面ごとに別の人格を創って移し替え、自己の記憶とは切り離すことで処理する解離性同一性障害と似た症状を示す心の統合を崩した人びとの増加へと繋がる<sup>87</sup>。香山氏は心理学者の中村雅彦氏の言葉を引用し、自己反省や熟考を回避するために自己と直面せず、安易に他者への「呪い」に向かうことさえする、そのような人びとの状況を、アイデンティティが拡散し、自我が脆弱になりつつあることのあるのではないかと危惧する<sup>88</sup>。理性的判断どころか考えることそのものの放棄に繋がるこの現象が、執筆者には、一人の人間として身体性・理性・霊性を統合し、各自が固有のアイデンティティを形成してゆくべき神の似姿である人間の可能性を大きく疎外する深刻な事態に見える。

しかし、同時に、これらの人びとこそ、マザーが愛すべき対象とした精神的孤児の人びとであり、その人びとを生み出したのは、日本社会の価値観であると考えられる。執筆者には、国の復興と経済成長を目指して邁進した戦後、人びとが抑圧し無視し続けた負の感情や嘆きが、目的達成に酔う傲慢さの陰として後の世代に背負わされているように見えるからである。返済しきれない借金と維持・管理しきれない構造物、自身が処理しきれない苦しみで自己を抑圧し、弱者に投影して他罰的に処理する自己責任論、不安を抱えて苛立つ大人たちの中で育てられ、自尊感情を抱けずに苦しむ人びとなど、十字架を背負う大勢の人びとが存在する。自我を形成するための安心した居場所を奪われ、家族の中でも孤独と寂しさを抱えて自信がなく、たとえ瞬間的であろうともそのような心の渇きが忘れられ満たされた気持ちが味わえるならば「何でもあり」という価値観を持つ人びとに、マザーテレサは呼びかける。そのような方法では、決して人間の渇きは癒せない。

マザーは、このような自己充足を求める激しい衝動を癒すことができるのは、神の愛だけであると語った。決して彼女自身の信仰を押し付けることはしなかったが、その信念は常に明確であった。人びとの渇きが実は愛への渇きであり、その愛の渇きを癒すためにこそ神は愛を求める人びとの中で渇く者となっていること、神はそのような姿を取ってまで、人間の近くにあることを望み、人間との間に愛の交わりを回復しようと熱望していることをマザーは繰り返して述べた。だから、神の愛に戻り、人びとの間に愛のかかわりを回復すること、そのためには、自分のためばかりでなく他人にも配慮し、他人の必要を満たすために自分の必要を抑える心を育てる必要があると語ったのである。更に「痛むまで愛する」ことこそが、人間の救いのために人となり、十字架上の苦しみと痛み、孤独と屈辱を甘受した神の似姿の

86. 香山リカ、前掲書、143頁

87. 同上、142 - 144頁

88. 同上、144 - 145頁。一方、片田珠美の前掲書では、幼児期に抱きがちな自己愛的万能感を抱えたままの若者が、現実社会の対人関係の中で自己概念の修正を迫られる危機に際して、孤立化と仮想現実への逃避によって他罰的傾向を強化させ、社会全体を敵視し、復讐としての拡大自殺的事件を起こす経緯を解説する。

アイデンティティーを生きる道であるとマザーは説く。執筆者は、現代にマザーテレサを遣わした神は、人びとに対して神の似姿の尊厳を回復するよう招いていると考える。

### II. 3. 3. 2. 世界の苦しみと痛みを受け止める招き

今回の震災は正に「言語に絶する」大災害であった。しかし、黙した後が大切である。言葉失う程の体験をした時に、人間の意識がどこへ向かうのかによって道は大きく分かれるからである。マザーの場合は神へと向かう。そして、神の思いの中に入るのである。神の意思は人間の願望と常に一致している訳ではないのであるから、食い違いが生じた場合には、まず、神の思いを聴かなければならない。

雨宮慧氏は「神」への信仰を打ち砕くような現実にはぶつかった場合の人間の三つの態度について述べる<sup>89</sup>。第一の態度は、現実を優先して信仰を否定する。すなわち、神は存在しないと考えて現実に迎合する道である<sup>90</sup>。第二は逆に、信仰を優先するために現実を否定する、すなわち、現実から目を背けて信仰の世界に閉じこもる道である<sup>91</sup>。しかし、雨宮氏は信仰も現実も否定せずに、ただ神に向かい「なぜ」と問う第三の道を選ぶのが真の信仰者であると述べる。それは、現実を人間理性に理解可能な形に改変することへ逃げるのでも、願望の投影に過ぎない幻想を絶対化して閉じこもるのでもなく、たとえ、どんなに苛酷な現実であろうとそれをしっかりと見据えた上で、人間にとって絶対的に「超越」であり続ける神と真面目に向き合うことが、信仰、特に神と緊密に結ばれた人の信仰と言えるからである。雨宮氏は神に「なぜ」と問うことは、不信仰の表れではなく、神だけが答えを出すことができると信じるからこそできることであり、神の答えを早く聞きたい、神に出会いたいという願望を表明する行為であると語る<sup>92</sup>。また、苦悩の奥底であろうと、もし、そこで神に出会えるならば、苦しみに耐えられることを知っている信仰者ならではの行為であると解釈する<sup>93</sup>。それは社会学者が、世界の宗教について解説する中で、宗教の特徴の一つを「現実に対する強烈な不満・否定の感情や、現実から脱出したいという強固な意志を表現する」<sup>94</sup>と説明する見方からは到達しえない帰依者の心的態度である。では、マザーは何と言うのだろうか。

苦しみと貧困とは違います。…苦しみは、わたしたち人間の知恵では理解することができない神様の特別なみ計らいです。ですから、苦しみについて説明することはできません。ただ、わたしの知っていることがひとつだけあります。人間が苦しんでいるとき、

89. 雨宮慧著『旧約聖書の預言者たち』（NHK ライブラリー、1997）166 - 167 頁

90. これは人間が自分の理性の正当性に固執する道である。

91. この道もまた、人間のエゴが既得の「安心・安定」を中心に現実が回る世界を構築しようとする幻想への固執である。

92. 雨宮慧、同上、166 頁

93. 宮本久雄著『「ヨブ記」物語の今日的問いかけ—苦難・神・他者の発見—』（新世社、2006）63 頁

94. 橋爪大三郎著『橋爪大三郎の社会学講義』（ちくま学芸文庫、2008）239 頁

神様はやさしいお父様のようにその人と共にいてくださるのです<sup>95</sup>。

現代人が、痛みや苦しみを回避する方法を探求するのに必死になり、良心どころか理性さえ放棄しかねない状況であるのに対し、マザーは、生活上の避けられない痛みを、わたしたちの思いの焦点を神に合わせる方法として使うように教えた<sup>96</sup>。少数の人びとの快適さを保障する技術の開発が進めば進むほど、その価値観の下で苦しむ人びとの数は増加していく。すでに、誰もが、人間の経験からすべての痛みを取り去ることなど不可能であり、むしろ、避けられない苦しみをどう受け止めるかを考えるべきであると気づいていながら、その事実を認めずにいる。人間は皆、痛みや苦しみを恐れるからである。

J・ラングフォード師は、マザーの証しは、苦痛を人間存在の普遍的条件として受け入れられることと、また、人間的弱さや傷つき易さから逃げ回る必要もないことを示したと語る<sup>97</sup>。また、マザーにとって痛みを拒否することは、神を拒否することであり、痛みは神が造り出したものでないとしても、痛みを拒否することは、痛みの中に隠れておられる慈しみ深い神と出会うチャンスを失うことであるという。むしろ、痛みや苦しみを抱きしめると、人は安楽を求める傾向や習慣、振舞いや態度からの離脱を実現し、心の底から神に任せる委託の道へと導かれる<sup>98</sup>。痛みは、人間の痛みを分かち合うためにご自身にはその必要もなかったにもかかわらず、敢えて、天から降り十字架にまで進まれた神との出会いの戸口であり、一人ひとりの魂の帰還を待っておられる父なる神のもとへ戻るよう動機づけられる摂理的配慮である<sup>99</sup>。そのため意識して避けるべきなのは、苦しみの中には神などいないと思わせ、自分で配慮しなければ誰も助けてはくれないと吹聴する無神論的イデオロギーである<sup>100</sup>。

イエスは内的苦しみのうちに、それを通して働かれます。霊的、感情的痛みを悪魔的と考える必要はありません。実際、痛みは表面的には暗い悪と見られ、後になって初めて、光の天使と認められるのです。この光は闇を耐え忍んだとき、初めてわたしたちの心の中で輝きます。大きな痛みの後で、神をもっとはっきり見ることが出来ます。神からのあらゆるコミュニケーションがそうであるように、痛みについても同じです。<sup>101</sup>

95. 『わたしはマザーに会った 20人が語るマザー・テレサのすがた』2001年、女子パウロ会、68-9頁：メリノール女子修道会会員 Sr. ジーン・ファローンの文章より

96. J・ラングフォード、前掲書、293頁

97. 同上、293頁

98. 同上、293頁

99. 同上、294頁。注129 Paul Deblassie III, *Deep Prayer: Healing for the Hurting Soul* (New York: Crossroad Publishing Company, 1990), p.9

100. 同上、282頁

101. 同上、295頁。注130 Paul Deblassie III, *Deep Prayer*, p.9-10

もちろん、孤独と寂しさ、批判や拒否、侮辱と恥に傷つく感情的痛みを自ら求めるべきではない。しかし、求めずして訪れたものを恐れる必要もない。むしろ、それらに出会う時こそ、わたしたちは神と人を愛するよう呼ばれているのであり、自分たちと周囲にいる人たちが、どのような痛みと欠乏に直面するとしても、それを通し、その中でわたしたちは「キリストにおいて (ἐν Χριστῷ)」愛することを選択できるのである<sup>102</sup>。

### II. 3. 3. 沈黙の祈りへの招き

宗教学者の山折哲雄氏は日本の宗教心の母胎とも言える「天然の無常」という感覚に言及する<sup>103</sup>。日本人は昔から何度も言語に絶する現実と直面し、ただその現実の前に「沈黙」して祈り、神仏に委ねる以外になかった経験を繰り返してきた。その経験から「天然の無常」が、宗教心の原点となったと語る<sup>104</sup>。つまり、人間は必ず滅びる者であることを悟り、しかもその滅びゆく者に対して無限の共感の涙を注ぎつつ、その深い悲しみの中で人と人との気持ちを通じ合うところで祈りが生まれるというような感性が、日本人の宗教心の母胎であると説明する<sup>105</sup>。猛威をふるう自然の前に無力であることを認めて頭を垂れながらも、決して諦めるのではなくニヒリズムに陥るのでもなく、却って、その自然の中に宿っている神の声を聞き、神の心を感じ取ろうとする感性を、日本人は生きる知恵として磨いてきたというのである<sup>106</sup>。

その山折氏が、マザーテレサから感じ取った「宗教の究極の姿」は、「悲哀の中の祈り」というものであった<sup>107</sup>。山折氏は、わずか5分の面接の会話で、マザーが死者の看取りという活動など、多くの地獄のような現実を目の前にして為す術のない時には、「ただ祈ります」と答えたその姿によって、マザーが宗教の本質を体現している人であることを直観したというのである。両者には宗教は違ってもその根底に共通して流れる、人間の「悲しみに対する共感から生まれる祈り」への響き合いがあったのであろう。倫理学者の竹内整一氏も日本人の感性に関して興味深い説明をしている。日本人は、自然災害の凄まじさを前にしたとき、たとえ自分たちが大海の一滴であるとしても、その一滴は、かけがえのない一回性を備えた一滴であり、おおきな命の営みの中に包まれて存在している一滴であるという自覚を持ち、その一回性一滴の命を懸命に生きようとする精神を持っていることを語る<sup>108</sup>。そして、苛酷な現実を受け止めつつも、尚、新たな一歩を踏み出そうとする時の掛け声、リズム、はずみ

---

102. J・ラングフォード、前掲書、295頁

103. 「サンデー毎日緊急増刊東日本大震災2」4月23日号、(毎日新聞社、2011)4頁。地震学者寺田寅彦著「日本人の無常観」に言及。

104. 山折哲雄著『宗教の力—日本人の心はどこへ行くのか—』(PHP新書070、1999)38頁

105. 同上、38頁

106. 同上、30—31頁。寺田寅彦の思想の解説。

107. 同上、36—37頁

108. 竹内整一著『なぜ日本人は「さようなら」といって別れるのか』(ちくま新書764、2009)153—154頁

として「さようなら」という挨拶を交わすのであると説明する<sup>109</sup>。

執筆者は、3.11の後、捜索活動に献身する消防レスキュー隊、自衛隊、警察隊、一般の人々の悲痛な姿を目にした時、そこに「失われた羊を探すイエスの姿」「神の愛の対象であるイマゴ・デイとして作られた人間の魂を尋ね歩くイエスの姿」を見る思いがした。疲れ果てて横たわる日々、足を棒にして親類や知人を探し回る人びとの歩みこそが、神である父との交流・関わりの中へ、失われた人々を連れ戻すために、その人の傍らを訪れる「贖い主の姿」であると感じた。たとえ、具体的に有効な手段を用いて何かができるということはなくとも、そこに誰かが共にいると伝えるだけで、そこまでして訪れてくれた誰かの存在は、人間が求める愛を伝えないだろうか。そしてその愛以上に生きるために必要とされているものがあるだろうか。この人間愛の経験から類推するとき、イエスの愛の現存に触れ、その存在の確実性を体験した人が、絶望から立ち上がり、死を恐れずに生きる力を回復する事実が理解可能になる。

マザーが名刺として人びとに与えていた言葉を思い出す。それは、「沈黙の実りは祈り。祈りの実りは信仰。信仰の実りは愛。愛の実りは奉仕。奉仕の実りは平和」<sup>110</sup> というものである。すべては、わたしたちの魂を神の御手の中に置く祈りから始まるという意味であろう。沈黙の中で、わたしたちの心の最も深い聖所で、一人きりでイエスと生きる努力をするとき、人間の悲哀や渇きに共感している神に出会うことができ、そこで神はわたしたちの魂を再創造されるからである<sup>111</sup>。

第一の方法は沈黙を使うことです。祈りの魂は大沈黙の魂です。内的、外的沈黙を実践しないならば、神の現存に直接自分たちを置くことはできません。<sup>112</sup>

沈黙のうちに新しいエネルギーと真の一致を見出しましょう。神のエネルギーは、わたしたちがすべてをうまく運ぶために与えられるでしょう。神の思いとわたしたちの思いとの一致、神の祈りとわたしたちの祈りの一致、神の行動とわたしたちの行動の一致、神の命とわたしたちの命の一致。<sup>113</sup>

沈黙の祈りに入り、その中で一人ひとりに親しく語りかける神の声を聞き、その神の思いに自分の思いを一致させることを選ぶ訓練を繰り返す時、人は神の変容の働きを受け、神の

109. 同上、109頁

110. 写真・編訳片柳弘史『愛する子どもたちへ マザー・テレサの遺言』（2001年、ドン・ボスコ社）60頁。1996年共労者に宛てた手紙。

111. J・ラングフォード、前掲書、258頁。注115 Spiritual Directory of the Missionaries of Charity Sisters.

112. 同上、256頁。注114に Mother Teresa's letters to the M.C.Sisters, October 11, 1968 とある。

113. 同上、269頁。注120 Excerpt from Mother Teresa's letters to the M.C. Sisters (December 27, 1963), paraphrasing Abbe Gaston Courtois.

思いとまなざしを通して自分自身と現実社会を見ることを学べば、自分に与えられた世界の苦しみの一部を担い、自分の十字架を背負ってイエスに従う道を歩むことができるように支えられるのである<sup>114</sup>。それは、かけがえのないわたしを実現するために、特殊な能力や経験を求めることとは異なる、真の自己超越の道である<sup>115</sup>。

### III. 結論 マザーテレサの現代的意義

戦争の世紀と言われた 20 世紀を生きたマザーテレサの現代的意義は、どのような悲惨な現実があろうとも、神は存在し、人間が神に愛された神の似姿であることに変わりはないというキリスト教信仰の確認と証明である。マザーテレサが繰り返し語った聖書の言葉は以下のものである。

女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。  
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。  
たとえ、女たちが忘れようとも  
わたしがあなたを忘れることは決してない。  
見よ、わたしはあなたを  
わたしの手のひらに刻みつける。 (イザヤ書 49 章 15 - 16 節)

また、愛に飢え渴いてさまよい歩く人びとが溢れる現代社会に向けて、マザーテレサの存在が反映する聖書の言葉は次のものである。

渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。  
銀を持たない者も来るがよい。  
穀物を求めて、食べよ。  
来て、銀を払うことなく穀物を求め  
価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。  
なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い  
飢えを満たさぬもののために労するのか。  
わたしに聞き従えば  
良いものを食べるができる。

---

114. J・ラングフォード、前掲書、269 頁

115. 香山リカ、前掲書、135 頁。オウム真理教信者が陥った誤謬として、「かけがえのない私」を実現する方法として、「超能力」の獲得を目指す道に陥ったことを指摘している。

あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。

耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。

聞き従って、魂に命を得よ。 （イザヤ書 55 章 1 - 3 節 a）

執筆者は、マザーテレサは、神が今も世界の人びとを招いていることの証しであると考えている。人間のエゴイズムがいのちそのものを脅かし、かつて人間性の優れた特徴であった利他行動は、今や動物にも劣るほどしか見られない状態となった。不安や恐怖が広がる世界の中で、道を見失った人びとにマザーの存在は語りかける。たとえ多くの苦しみの最中にあるとしても、わたしたちは神に愛され、祝福された存在であり、祝福そのものであることを思い出ささいと<sup>116</sup>。このような社会を作り出したのは神ではなく、あくまでも、人間の仕業であるにもかかわらず、神はこの世の強者の側ではなく、それら強者の強欲の犠牲となって苦しむ人びとの側に立ち、しかも、それらの人びとの姿をとって、すべての人びとの心の扉をたたくのである。

「自分に閉じこもらず、あなたの心の扉を開いてください」と<sup>117</sup>。

その静かでかすかな声は単なる好奇心や慰めとしてではなく、真剣に神を探し求める人びとを招く呼びかけである。沈黙の中で発せられる神の言には虚無と混沌の中に光を創造する力があり<sup>118</sup>、ご自身の似姿として創造した人間の背きを赦し、尊厳を回復させる働きがある。問題は、人が自分に語りかけている神の言に耳を傾けるか否かである。

マザーは「わたしたちは愛し、愛されるために創造されました」と繰り返し語った。苦しみを無くすことはできないとしても、人間には「人間らしく」苦しむことができる力がある<sup>119</sup>。貧しい人や苦しむ人の中に神を見出すことが出来る人は、神に一致して苦しむことの喜びを知る神の似姿へと変容される道を進む。

震災からの復興を考える今、市場原理に翻弄される社会の価値観を見直し、より人間的な生き方を再構築するためにも、宗教的視座の回復が必要であると考えている。人間の心が究極的に求めている平和と喜びは、物質的なものの内にも、痛みや苦しみを全く排除した人間の自律の中にも見出せるものではないと主張したい。むしろ、痛みや悲しみの中にある「他者のために、他者と共に」生きるよう招く神の招きに心を開いて一致し、現実の中で愛する道を一歩一歩進んでゆくことの中にあると訴えたい。互いに愛し合い支え合う生き方や態度を選択することを積み重ねる人生の中に、神の似姿の尊厳回復への道があることをマザーテレサの人生は証した。人間観の中に超越的視座を回復し、神と結ばれて生きる人間の尊厳を

116. J・ラングフォード、前掲書、296 頁

117. ヨハネの黙示録 3 章 20 節

118. 創世記 1 章 1 - 3 節

119. 宮本久雄著『「ヨブ記」物語の今日的問いかけ—苦難・神・他者の発見—』（新世社、2006）62 頁

守る上で、マザーテレサの存在が現代社会の中で持つ意義は大きいと考える<sup>120</sup>。

## 参考文献

- 兩宮慧著『旧約聖書のこころ』女子パウロ会、1989
- 兩宮慧著『旧約聖書の預言者たち』NHK ライブラリー、1997
- アンセルモ・マタイス著『イエスを愛した女 マザー・テレサ』現代書林、1997
- エーリッヒ・フロム著『愛するということ』鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991
- イグナチオ・デ・ロヨラ著『靈操』門脇佳吉訳、岩波書店、1995
- 岩島忠彦著『イエス・キリストの履歴』オリエンズ宗教研究所、2011
- 土井隆義著『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像—』岩波書店、2009
- 古荘純一著『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社、2009
- 橋爪大三郎著『橋爪大三郎の社会学講義』ちくま学芸文庫、2008
- 五十嵐薫著『マザー・テレサの真実—なぜ、「神の愛の宣教者会」をつくったのか—』PHP 研究所、2007
- 五十嵐薫著『マザー・テレサ 愛の贈り物』PHP 研究所、2010
- ジャヤ・チャリハ&エドワード・ジョリー編『マザー・テレサ日々のことば』いなますみかこ訳、女子パウロ会、2000
- ジョゼフ・ラングフォード著『マザーテレサの秘められた炎』里見貞代訳、女子パウロ会、2011
- 女子パウロ会編『わたしはマザーに会った』女子パウロ会、2001
- 女子パウロ会編『愛、マザー・テレサ日本人へのメッセージ』三保元訳、女子パウロ会、2003
- 『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1987
- 片田珠美著『無差別殺人の精神分析』新潮選書、2009
- 片柳弘史編訳『愛する子どもたちへ マザー・テレサの遺言』ドン・ボスコ社、2001
- 片柳弘史編訳『わたしはあなたをわすれない マザー・テレサのこころ』ドン・ボスコ社、2001
- 片柳弘史編訳『聖なる者となりなさい マザー・テレサの生き方』ドン・ボスコ社、2002
- 片柳弘史著『カルカタ日記マザー・テレサに出会って』、ドン・ボスコ社、2003
- 片柳弘史著『マザー・テレサは生きている』教友社、2010
- 香山リカ著『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』幻冬舎、2006

---

120. 「マザーテレサ」の表記に関して、今回、執筆者は本論文の主要な参考文献であるJ・ラングフォード師の著作に倣い、「マザー・テレサ」ではなく、「マザーテレサ」を採用した。

- 教皇庁国際神学委員会著『人間の尊厳と科学技術』岩本潤一訳、カトリック中央協議会、2006
- 工藤裕美/シ ril・ヴェリヤト共著『宣教師マザーテレサの生涯』上智大学出版、2007
- ルシンダ・ヴァーディ編『マザー・テレサ語る』猪熊弘子訳、早川書房、1997
- マルコム・マゲリッジ著『マザーテレサ すばらしいことを神さまのために』沢田和夫訳、女子パウロ会、1976
- 宮本久雄著『「ヨブ記」物語の今日的問いかけ—苦難・神・他者の発見—』新世社、2006
- 大貫隆/名取四郎/宮本久雄/百瀬文晃編著『岩波 キリスト教辞典』岩波書店、2002
- 清水康之・湯浅誠著『闇の中に光を見いだす—貧困・自殺の現場から—』岩波書店、2010
- 竹内整一著『なぜ日本人は「さようなら」といって別れるのか』ちくま新書、2009
- 天外同朗著『ここまで来た「あの世」の科学』祥伝社、2005
- 和田町子著『人と思想 マザーテレサ』清水書院、1994
- ヴォルフガング・バーダー編『マザー・テレサ 100 の言葉』女子パウロ会、2009
- 山折哲雄著『宗教の力—日本人の心はどこへ行くのか—』PHP 新書、1999

